

軍 事 史 学

第 60 卷 第 4 号

卷 頭 言

軍事史学会の原点に立ち返って——創設六〇年—— 庄司潤一郎

この三月、軍事史学会は昭和四十年の創設から六〇年を迎える。人間に譬えれば、「還暦」ということになる。創設の趣旨には、「歴史の進展は、人類の斗闘の大なる影響を受けており、軍事・戦争に関する史的な研究を除いては、歴史の真実をあきらかにすることは不可能であり、また、平和を論ずることも困難であります」と述べられていた。

初代代表（会長）となった平田俊春防衛大学校名誉教授をはじめ、荻野三七彦早稲田大学教授、栗原健外務省外交文書編集官など錚々たる歴史家が理事に名を連ねた。一方、関係者の回想によると、創設当初より、学会のあり方をめぐって様々な見解が存在していた。その後も、本学会では、軍事史学のあるべき姿について、折に触れて学会誌誌上において議論がなされてきた。

特に、一九七〇年代から八〇年代にかけて、活発に行われた。例えば（掲載順）、浅野祐吾「明治陸軍の戦史研究について——軍学共同研究の場を求めて——」（第七巻第四号）、近藤新治「戦史と史学について——戦史編纂官の立場から——」（第八巻第二号）、阿南惟敬「戦史学はありえないか——近藤論文を読んで——」（第九巻第二号）、長嶺秀雄「戦史学について——阿南論文を読んで——」（第九巻第三号）、安井久善「戦史学への道——史学と軍事史と戦史とをめぐって——」（第十巻第四号）、田中宏巳「新しい軍事史学の構想について」（第十三巻第一号）、近藤新治「軍事史学の曲り角」（第十八巻第四号）、浅野祐吾「戦史おぼえ書（遺稿）」（同などである。

さらに、「軍事史学会はこれよりいのか（対談・小林幸輔・浅野祐吾）」（第十五巻第一号）、「軍事史研究はこれよりいのか（座談会・池井優・桑田悦・近藤新治・波多野澄雄）」（第十五巻第四号）などの座談会も企画された。論点は、目的（使命）、方法論、体系、戦史と軍事史の区分け、歴史学との共通点と相違点など多岐に及んだが、いずれも軍事史学のあるべき姿に関する本質的な問題であった。

一例をあげれば、戦史が実学であるか否かをめぐって、阿南氏は、「学問はもと」と『迂遠な途』なのであって、戦史においても、ただ「役に立つ」目的で研究されるかぎり、それは『戦史学』になり得ないし、戦史の本質に迫ることもできない」と主張した。

一方、同じ防衛大学校の長嶺氏は、「そもそも戦史は、役に立つことを狙いとすべきである。史学の場合は数百年後に役に立てば良いというお考えもあろう。しかし戦史はそうは行かないのである」と反論したのであった。

現在、多くの歴史学会において、特定のテーマに関する精緻な研究は輩出するものの、拠って立つ歴史学の意味についてほとんど議論されることはない。本学会でも、大東亜戦争を中心とする近代日本軍事史に偏重しているのではないかとといった研究対象についての議論はある一方、軍事史学そのものについて語られることはあまりない。創設六〇年は、改めて原点に返って軍事史学及び軍事史学会のあり方について考える良い機会ではないだろうか。

（軍事史学会会長）